

新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（中編）  
首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010

Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 2):  
An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009-2010

水野 剛也・福田 朋実

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

はじめに 前編の要約と中編のねらい

本論文は、鳩山由紀夫首相の在任期間中（2009年9月16日～2010年6月8日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本誌前号（第50巻・第1号、2012年12月）に掲載した前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰した。

本号に掲載する中編からいよいよ本題に入り、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を質的に分析する。

本誌次号（第51巻・第1号）に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

本誌前号（前編）に掲載。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本誌前号（前編）に掲載。

3 新聞4コマ漫画が描く鳩山首相

本項では、鳩山首相を描いた作品を漫画ごとに質的に分析する。

・アサッテ君 (東海林さだお) 『毎日新聞』 (朝刊)

『毎日新聞』の朝刊で連載されている「アサッテ君」(東海林さだお)は、平凡な会社員の朝手春男とその家族の庶民的な日常生活を、ときに時事問題にからめて描く漫画である。朝手家は6人家族で、主人公・春男、妻・秋子、小学生の長男・夏夫、幼稚園児の長女・冬美、春男の両親・昼吉と夕子、からなる。作品の舞台となるのは主に彼らの家庭や職場である。連載を開始したのは1974年6月で、2003年11月に1万回を達成し、本論文執筆時点(2012年11月)でも1万3,000回を超えてなお継続中である。<sup>16</sup>

「モテない、カネない、度胸もない」主人公とは対照的に、作者の東海林さだお(本名・庄司禎雄)は長年にわたりめざましい活躍をつづけている漫画家である。1937年に東京都杉並区で生まれた東海林は、早稲田大学入学後から本格的に漫画を描きはじめ、大学を中退後、1967年に実質的なデビュー作である「新漫画文学全集」(『週刊漫画TIMES』)の連載を手がけた。その他の代表作として、「タンマ君」(『週刊文春』)、「サラリーマン専科」(『週刊現代』)、「ショージ君」(『週刊漫画サンデー』)などがあり、食べ物に関するコラム「あれも食いたい これも食いたい」(『週刊朝日』)でも有名である。受賞(章)歴も多彩で、第16回文藝春秋漫画賞(1970年)、第11回講談社エッセイ賞(1995年)、第45回菊地寛賞(1997年)、紫綬褒章(2000年)、旭日小綬章(2011年)、などがある。2001年には「アサッテ君」で第30回日本漫画家協会賞大賞を受賞している。<sup>17</sup>

少なくとも小泉純一郎以降、「アサッテ君」は毎年、一定数の作品で必ず現役の首相を取りあげてきたが、その特徴は鳩山の在任期間中も継続して見られた。「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊、207本中11本=5.31%)には及ばないものの、259本中7本(2.70%)の作品で鳩山を描いている。1年弱で交代をくり返した安倍晋三・福田康夫・麻生太郎よりもさらに短い8ヵ月強で辞任したにもかかわらず、安定した頻度・本数で鳩山を描いており、先行研究(本論文前編・後注3参照)が「時事的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。なお、小泉から鳩山までの5人全員を複数の作品で描いているのは、3大紙の4コマ漫画のなかでは「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけである。いずれの首相についても、「アサッテ君」の本数・頻度は「地球防衛家のヒトビト」について多い。また、同じ時事漫画でも、先行研究は「アサッテ君」を「世論反映型」、「地球防衛家のヒトビト」を「自己主張型」と区別して特徴づけているが、この点については後述する。<sup>18</sup>

「アサッテ君」における鳩山の「描かれやすさ」を、頻度を基準に小泉から麻生までの4人と比較すると、鳩山はもっとも「描かれやすい」首相であった。在任期間が異なるため頻度で順位づけると、鳩山の2.70%(259本中7本)は最高値で、それに麻生=2.38%(335本中8本)、安倍=2.37%(337本中8本)、小泉=0.87%(1,825本中16本)、福田=0.59%(335本中2本)がつづく。鳩山は実に福田の4.5倍強、小泉の3倍強の頻度で作品化されている。本論文の前編で指摘したように、また後述するように、政権交代を達成し華々しく登場したものの短時間で看板倒れのように辞任したことが、鳩山がもっとも「描かれやすい」首相になった主因の1つだと考えられる。

次に、鳩山を描いた7本の作品の質的な分析に移るが、そこで参考になるのは、とくに安倍・福田

の作品を分析した先行研究である。そこで示されている類型化モデルは小泉の先行研究を微調整したもので、「アサッテ君」の首相描写をまず政治的な批評性・風刺性の濃淡により2パターンにわけ、両パターンをさらに現実の言動・フィクションという2つの要素により細分化する、というものである。麻生を扱った先行研究もこの分析モデルを採用している。

より具体的には、先行研究は「アサッテ君」の首相描写を以下の4パターンに大別している。

- 1 批評・風刺性薄い+現実 現実にあった首相の言動や政治・社会問題に関連させて首相を登場させるが、最終的には家庭内の些事など首相や政治問題とは関係の薄いオチやシャレに帰結させる。
- 2 批評・風刺性薄い+フィクション パターン1と同じく政治とは関係の薄いオチやシャレにつなげるために首相を登場させるが、そこで示される首相の言動や政治・社会問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。
- 3 批評・風刺性濃い+現実 現実にあった首相の言動や政治・社会問題に関連させて首相を登場させ、かつ主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせる。
- 4 批評・風刺性濃い+フィクション パターン3と同じく主人公一家をはじめ一般庶民に皮肉っぽく首相を語らせるが、そこで示される首相の言動や政治・社会問題は現実のものでなく、作者がつくりだしたフィクションである。

先行研究によれば、各類型は互いに完全に排他的でなく、1つの作品に複数のパターンが混在する場合や、どのパターンに分類すべきか明確に判断しにくい場合もある。ただし、鳩山を描いた作品のほとんどは、いずれかのパターンに比較的容易に分類することができる。このことから、上述の類型化モデルが相当の妥当性を有していることがわかる。

個々の作品を分析する前に、全体を見わたして目につく特徴は、鳩山を描いた7本の作品のすべてがパターン1（批評・風刺性薄い+現実=2本）かパターン3（批評・風刺性濃い+現実=5本）に分類できる、つまり何らかの形で現実にあった首相の言動を題材にしている点である。逆にいえば、フィクショナルな設定で首相を登場させる作品は皆無であった。

その理由を合理的に説明し尽くせる決定的な材料はないが、1つの解釈として、鳩山の発言や行動がそのまま漫画の題材にできるほど社会で注目を浴び、かつ批評・風刺しやすいものであったと考えることができる。というのも、7本中5本は明らかに批判的な文脈（パターン3）で首相を描いているからである。作品の具体的な題材を見ても、沖縄県にあるアメリカ軍の普天間飛行場の移設、献金疑惑、小沢一郎・民主党幹事長との力関係など、在任期間を通じてきびしく批判されつづけた問題ばかりである。1本だけ抽象的な「評判のわるさ」を題材とするものがあるが（図7）、それにしても、他の作品が扱っている具体的な問題を集積した結果としての「評判のわるさ」であることは明白である。



れで、いずれも沖縄県にあるアメリカ軍の普天間飛行場の移設問題を扱っている。

現実としてあった言動に関連づけて首相を登場させるが、最終的には非政治的なオチやシャレに帰結させるこの描き方は、先行研究が指摘するように本来は「アサッテ君」が「もっとも得意とするパターン」である。首相が登場しなくても、実際に生起した社会問題などを手がかりとして、たわいのない結末で終わる作品は多い。

図1はその典型例で、飛行場の移設について「腹案を持ち合わせている」（1コマ）という首相の発言を引きあいだし、夏のボーナスで「服」を買うつもりであることを秋子が「服案を持ち合わせています」（4コマ）とダジャレにしている。「腹案を持ち合わせている」は首相が実際に口にした発言であるが（2010年3月31日の党首討論）、作品の話題はその後、飛行場問題から家庭内の些事へと飛躍してしまう。登場人物の会話からも政治的な含意は読みとれない。<sup>19</sup>

同じく飛行場問題を扱った図2もパターン1に分類できる。この作品の主題も、飛行場の移転先さがしに苦慮する首相から、2コマ目以降で家庭内の些事に転じてしまっている。作品は最終的に、「減量10キロ!」（4コマ）という目標を掲げていた秋子が、長男の夏夫に「できたためしがない」（3コマ）と指摘され、恥ずかしそうに前言を撤回するというオチで終わっている。この作品展開は、図1と同じく明らかにパターン1のそれである。

ただし、図2について看過できないのは、基本的な構造は非政治的なオチにつなげるパターン1であるものの、首相を皮肉るパターン3の要素も多分に含んでいると考えられる点である。つまり、「できないことは最初からいわなければよかったんだよね」（1コマ）という夏夫の発言は、吹きだし内に鳩山の似顔絵が描かれていることから明白なように、飛行場問題で窮地に陥っていた首相に対するあてこすりである。鳩山は、首相に就任する以前から「最低でも県外（に移設する）」と断言し、就任後も「腹案」があるとまで公言していたが、この作品が掲載された時点では問題を打開する手だてをほぼ失っていた。結局、約2週間後の2010年5月28日には沖縄「県内」の辺野古周辺へ移設する日米合意を発表し、同日、県外移設に固執する社民党の福島瑞穂党首を閣僚から罷免する事態となった。さらに、それから1週間もしない6月2日、鳩山は突然に辞意を表明している。この作品には、自ら公言したとおりに問題を解決できない鳩山に対する揶揄がはっきりと認められる。<sup>20</sup>

図2が象徴するように、また後述するように、鳩山を描いた作品には政治的な批評・風刺が込められたものが目立つ。これは以前の「アサッテ君」にはあまり見られなかった特徴で、先行研究によれば、小泉と安倍を描いた作品では図1のようなたわいのない描き方が「もっとも得意とするパターン」であった。ところが、福田と麻生の在任期間中には政治的な批判性を帯びた作品が過半数を占め、その傾向は鳩山でも継続して見られる。

鳩山を描いた残る5本の作品がすべてパターン3（批評・風刺性濃い+現実）に分類できることから、「アサッテ君」による首相の描き方が批評性・風刺性を強める傾向にあることが確認できる。これらの作品のなかで鳩山は、現実としてあった言動や政治問題に絡んで登場し、かつ主人公一家に皮肉っぽく語られる存在である。

# アサッテ君

東海林さだお

(12241)



図3 2010年6月8日号 (No.12241)

その1つ、2010年6月8日号 (No.12241、図3) の作品は、たわいのない家庭の些事を描く「得意のパターン」を取り入れつつ、最終的には首相の飛行場問題への対応を鋭く批判する内容である。「最低でも回転ずし」をおごとと約束する春男に対し (1~3コマ)、妻の秋子が「最近では『最低でも』が信用できないからねえ」 (4コマ) と疑っている。またもや吹きだし内に鳩山の姿が描かれていることからわかるように、念頭にあるのは「最低でも県外」 (4コマ) という公約を実現できずにいる鳩山である。自身の言葉どおりに問題を解決できない首相をあてこすっている。なお、この作品が掲載された時点で鳩山はすでに辞意を表明しており、同日中に菅直人が正式に首相に就任することが決定していた。「アサッテ君」が鳩山を首相として描いた最後の作品である。

政治資金をめぐる疑惑を扱っている別の2本の作品にも、現実の政治問題を下地とした旺盛な批評性・風刺性が認められる。その1つ、2009年11月28日号 (No.12055、図4) の作品は、夕子が春男に突然千円を与えたことと対比させ、資産家の実母から巨額の政治資金を提供されていた (しかもその事実を「まったく知らなかった」と釈明した) 首相を皮肉っている。わずかな小遣いの授受それ自体は家庭内の小さな出来事でありパターン1の要素を含んでいるともいえるが、最終コマで「母から十億円 鳩山首相」と報じる新聞を描く構造は明らかにパターン3のそれである。2010年5月18日号 (No.12221、図5) の作品も首相の献金問題をやり玉にあげている。「音痴には……いろいろあるが」「さすがに金音痴<sup>かね</sup>っていないよな」という春男に対し (1~2コマ)、「いる!!」

(3~4コマ) と同僚が鳩山を名指ししている。裕福な家庭に育ち、かつ巨額の献金疑惑で批判される首相を揶揄していることは間違いない。<sup>21</sup>

分析をさらにすすめると、献金疑惑を取りあげたこれらの作品は、一般庶民の感覚ではとうてい理解できない別世界の住人として首相を描いており、ここに先行研究がいう「世論反映型」漫画としての「アサッテ君」の特徴がよくあらわれている。次に論じる図6でも母親からの献金が皮肉の材料と



# アサツテ君

東海林さだお

(12113)



図6 2010年1月27日号 (No.12113)

ここで鳩山とともに登場しているのは民主党の小沢一郎幹事長で、「イッチャン ゼネコン」(2コマ)は小沢がゼネコン(総合建設業者)から不正な資金を受けていたとされる疑惑をさしている。他方、鳩山の「ハトちゃんマザコン」(3コマ)は、前述した実母からの巨額の献金問題をあてこすったものである。最後の「民主党をイッチャン リモコン」(4コマ)は、党首である鳩山よりも幹事長の小沢のほうが民主党内で力をもっていると指摘されていることを皮肉っている。

図6についてさらに注目すべきは、他の政治家と対比・並列して描く手法が、麻生にひきつづき鳩山にも使われている点で、ここからも「アサツテ君」の首相描写が政治的な批評性・風刺性を強める傾向にあることがわかる。麻生の在任期間中は、アメリカのバラク・オバマ大統領と対比して首相を描く作品が1本(2009年2月8日号、No.11783)あった。先行研究が指摘しているように、他の政治家と対比・並列して描く手法は、同じ時事の4コマ漫画でも「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」(『朝日新聞』夕刊)でよく採用される。その描き方が「アサツテ君」にも見られはじめている事実は、この漫画の首相描写が批評性・風刺性を強める傾向にあることを示している。<sup>22</sup>

鳩山を描いた最後の7本目として、首相の具体的な言動ではなく、やや抽象的ながら「評判がわるい」という事実そのものを題材としている2010年5月22日号(No.12225、図7)の作品を紹介する。鳩山に対する社会的評価が低迷している現状をふまえ、「肩身狭いよな」「ハト迷惑」(3~4コマ)と2羽の鳩がうつむきながらダジャレをいう、という内容である。厳密にいえば、

首相を皮肉っているのは「主人公一家をはじめ一般庶民」ではなく「鳩」であるから、他の作品ほど明確にパターンわけできるわけではない。しかし、首相の人気の凋落していることは事実であり、かつ擬人化された鳩がそのことについて否定的な言葉を交わしていることから、庶民に現実の首相を皮肉っぽく語らせるパターン3に分類するのが自然である。

参考までに、図7のように首相を描いた作品中に主人公一家がまったく登場しない事例は、「ア

サッテ君」に限らずきわめてまれである。鳩山の在任期間中は、「アサッテ君」の図7以外では後編で分析する予定の「ののちゃん」の1本（2010年4月21日号、No.4533）と「地球防衛家のヒトビト」の1本（2009年11月6日号）しかない。

本論文にとって図7がとくに重要なのは、これまで分析した他の作品とあわせて、まさに「アサッテ君」が「世論反映型」であるがゆえに、首相の描き方における批判性が増していると分析できるからである。この作品が掲載された2010年5月の内閣支持率は19%（朝日新聞社の世論調査、本論文前編・表8参照）で、政権発足当初の71%から実に50%以上も下落していた。この「評判のわるさ」が、これまで分析してきた作品群が取りあげている種々の問題に起因することは明らかである。政権に対する社会的評価の悪化を敏感にとらえているからこそ、つまり「世論反映型」であるからこそ、図7をはじめ鳩山を描いた作品には批評性・風刺性の濃いものが目立つと考えられる。その意味で、この作品は鳩山の在任期間中の「アサッテ君」の作風を集約しているといえる。

さらにいえば、「評判のわるさ」を題材にした図7の存在は、本論文の前編で指摘した、鳩山の「描かれやすさ」の本質はその「落差」にあるという分析を支持する。歴史的といえる総選挙による政権交代を実現した鳩山は、順風満帆で政権を発足させたかのように見えた。しかし、これまで分析してきた作品で描かれているように、沖縄県のアメリカ軍飛行場移設、政治資金をめぐる疑惑、小沢一郎との関係など数々の難問をかかえ、最終的には支持率を10%台まで落とした末に突然に辞任してしまった。つまり、わずか8ヵ月強の間に社会的評価が反転した、その急激な「落差」が「描かれやすさ」につながったと考えられるわけであるが、文字どおり「評判のわるさ」を題材とする図7は、この見方の妥当性を補強してくれる。

補足として、本論文が設定した「首相を描いている作品」の定義には合致しないが、鳩山が就任する直前、麻生の在任期間中に新首相への期待をうかがわせる作品が1本あることも、上述の論点を下

# アサッテ君

東海林さだお

(12225)

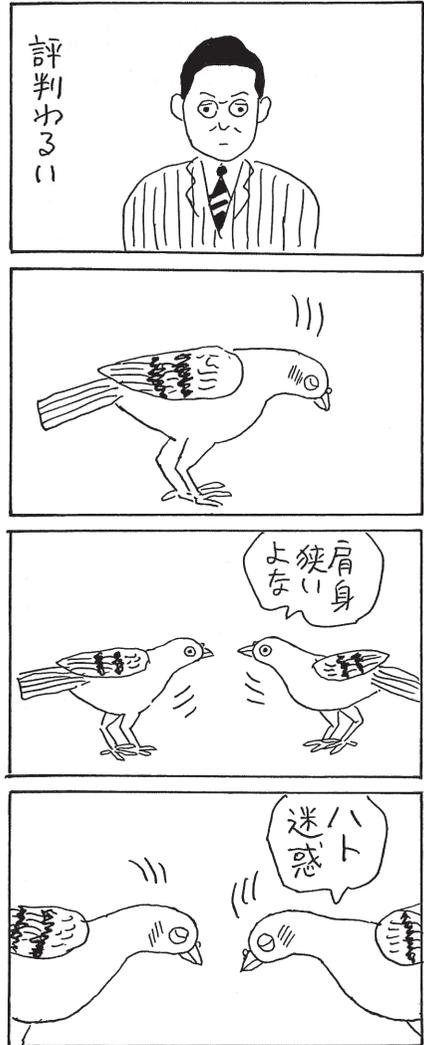


図7 2010年5月22日号 (No.12225)



図8 2009年9月4日号 (No.11972)

支えする。2009年9月4日号 (No.11972、図8) の作品がそれで、春男と彼の同僚が、鳩山が持論とする政治理念である「友愛」を話題にして、どちらが飲食代を払うか冗談まじりに相談している。政治的な批評性・風刺性が希薄で「アサッテ君」が本来「もっとも得意とするパターン」であるが、本論文にとって重要なのは、「『友愛』っていいなあ」(1コマ)と次期首相に確定している鳩山に対する庶民の期待感のようなものをただよわせている点である。実際、首相就任直後の2009年9月の内閣支持率は71%ときわめて高かった。そして、図8と図7を見比べれば、鳩山の描かれ方の変化は一目瞭然である。「友愛」をとнаえて登場した鳩山は、当初は社会から好意的に迎えられた。しかし、だからこそその後の消沈ぶりもいっそう際立ち、その結果としてもっとも「描かれやすい」首相になったと解釈できる。

さらにいえば、「アサッテ君」による鳩山の描き方にしても、鳩山の「描かれやすさ」にしても、それ単独ではなく、より長い時間枠のなかで理解する必要がある。なぜなら、鳩山の首相就任それ自体が、それ以前の自民党の政治家による政権運営をふまえて生じた現象だからである。自民党の前任者たちと民主党の鳩山との間には、確かに多くの差異がある。しかし、鳩山は自民党主導の政治を否定することで政権交代をなし遂げたのであるから、その意味において両者は完全に断絶しているわけではなく、相互に深く関係している。批判・挑戦する対象となる与党があるからこそ、野党も存在意義をもちえるのであり、両者は不可分の関係にある。

しかも、鳩山が率いる民主党の政権奪取は、政党や政治家間の離合集散などではなく、衆議院総選挙における有権者の選択によって実現した。換言すれば、自民党の

前任者たちに対する国民の評価あってこそその政権交代、そして鳩山の首相就任なのである。

民意により鳩山政権が誕生した事実は、とくに「アサッテ君」のような「世論反映型」の「時事的4コマ漫画」を理解する上では無視できない重要な点である。先行研究も指摘しているように、「アサッテ君」は「社会で話題となっている事象を積極的に取りあげているという意味で時事性が強く、

世相を敏感に反映」する。それゆえに、「世論と連動して首相の描き方に相当な柔軟性・可変性がある」と考えられるからである。実際、長期政権を維持した小泉に比べ、ほぼ1年ごとに交代をくり返し支持率も低かった安倍・福田・麻生のほうが「アサッテ君」ではより批判的に描かれていたことが先行研究で明らかになっている。

したがって、鳩山を描いた作品に批評性・風刺性が目立ったこと、また小泉以来の歴代の首相に比べ鳩山がもっとも「描かれやすい」首相であったことも、自民党の首相に対する否定的な評価、それとは対照的に高まった鳩山への期待、そして早期の落胆、という長期的な社会認識や感情の変化と無関係ではないと考えられる。小泉以後の3人の首相が人気低迷の末ほぼ1年ごとに交代し、ようやくその流れを断つと思われた新首相までもが、さらに短期間で離職してしまった。この一連の経緯に対する社会一般の批判的な受けとめ方を抜きにして、鳩山政権時の「アサッテ君」の首相描写を十全に理解することはできない。同じ理由で、鳩山以後の首相の描かれ方を考える際にも、より長い時間枠で作品を分析する視座が不可欠である。<sup>23</sup>

鳩山を示すシンボル（画像・文字・画像と文字）に目をむけると、7本中6本で画像が使用されている（画像のみ＝5本、併用＝1本）、つまり似顔絵で描かれることが多かったが、その意味についてはさまざまな分析や解釈が可能である。以下では、現時点で考えられる2つの有力な見方を示す。

第1に、単純に作者にとって鳩山が「似顔絵の描きやすい首相」であった可能性が考えられる。「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）でも画像の使用が多く（画像のみ＝6本、文字のみ＝2本、併用＝3本、本論文前編・表9参照）、鳩山の外見が漫画として描くのに適していたのかもしれない。

ただし、漫画という表現形態を考えれば、画像の使用が文字を上回ることは必ずしも特異とはいえない。「アサッテ君」で使用されるシンボルを首相別にまとめた表11を見ても、全体では文字よりも画像の方が若干多く使われている（画像のみ＝19本、文字のみ＝16本、併用＝6本）。

第2に、画像の使用が多いからといって、文字による描写を軽視できるわけではない。鳩山を描いた7本中でも2本で文字が使われているし（文字のみ＝1本、併用＝1本）、表11から明らかなように全体では文字と画像の使用は拮抗している。鳩山には該当しないかもしれないが、先行研究が指摘

表11 「アサッテ君」のシンボル使用（首相別）

	画像のみ	文字のみ	画像と文字（併用）
小泉	6本	9本	1本
安倍	4本	3本	1本
福田	1本	1本	0本
麻生	3本	2本	3本
鳩山	5本	1本	1本
合計	19本	16本	6本

しているように、4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくいいため文字により説明的に首相を描く必要性が高まる、という考え方も依然として説得力を保持している。いずれにせよ、本論文の前編で論じたように、シンボル使用については依然として解明すべき余地が多く残されていることだけは確かである。

最後に、先行研究に引きつづき本論文でも、マス・メディアの報道を媒介して首相を描く手法が少なくとも2本の作品で見られた点は見逃ごせない。図1と図4がそれで、いずれの作品でも首相は新聞報道の一部として描かれている。ただし、鳩山は雑誌やテレビのなかに描かれることはなかった。過去の首相では、小泉を描いた16本では新聞7本とテレビ1本、安倍を描いた8本では新聞3本とテレビ1本、福田を描いた2本ではテレビ1本、麻生を描いた8本では新聞が少なくとも1本（見方によっては2本）と雑誌1本、であった。マス・メディアの報道対象として首相を描くという特徴は、本論文の後編で分析する「地球防衛家のヒトビト」（『朝日新聞』夕刊）、また見方によっては「のちゃん」（『朝日新聞』朝刊）にも共通する新聞4コマ漫画の独自性であり、折に触れて指摘する。

#### ・ウチの場合は（森下裕美）『毎日新聞』（夕刊）

『毎日新聞』の夕刊で連載されている「ウチの場合は」（森下裕美）は、主人公一家である大門家の面々が家庭・学校・職場などでくり広げる日常生活を描いた、きわめて家庭的な4コマ漫画である。大門家は、小学2年生のボク・ユウヤ、小学5年生の姉・アサカ、広告代理店に勤務する父親・パン、優しくおっとりした母親・キョウコの4人からなる。拾われてきた飼い犬のモアもいる。彼ら以外にも、ユウヤの親友の信一や担任の先生、近所の人々、パンの同僚や上司など、さまざまな人物が登場する。「ウチの場合は」は、2001年6月に休止した「まっぴら君」（加藤芳郎）を引き継ぎ2002年1月4日号から連載を開始した。麻生太郎首相の在任期間中の2009年4月10日号に連載2,000回を迎え、本論文執筆時点（2012年11月）でも3,000回を超えてなお継続中である。<sup>24</sup>

作者の森下裕美は、本論文が分析対象とする漫画家のなかでもっとも若く、新聞4コマ漫画以外にも広く活躍している漫画家である。1962年に奈良県でうまれた森下は、1982年に「英語教師」で第6回ヤングジャンプ青年漫画大賞に準入選し、同年、「少年」（『月刊漫画ガロ』）でデビューした。同じ年に『週刊少年ジャンプ』でも「JUN」を連載し、その後は4コマ漫画を中心に活躍するが、最近では『大阪ハムレット』（双葉社、2006～10年、2009年に映画化）、『夜、海へ還るバス』（双葉社、2008年）、『トモちゃんはすごいブス』（双葉社、2011年～）など、家族を主題とした社会派のストーリー漫画にも取り組むようになった。「ウチの場合は」は、作者にとってはじめての新聞連載漫画である。その他の代表作に「少年アシベ」（『週刊ヤングジャンプ』、1991年にアニメ化）、主な受賞歴として第21回日本漫画家協会賞優秀賞（1992年）、第10回文化庁メディア芸術祭優秀賞（2006年）、第11回手塚治虫文化賞短編賞（2007年）、などがある。<sup>25</sup>

鳩山の在任期間中、「ウチの場合は」が首相を描くことは1度もなかったが（209本中0本）、このことは連載開始以来の作風を考えれば何ら不自然ではない。小泉も在任期間中を通じて1度も描かれ

ておらず（1,318本中0本）、安倍がようやく1本（245本中1本=0.40%）で作品化されたものの、福田（280本中0本）と麻生（275本中0本）は1度たりとも登場することがなかった。つまり、小泉政権時に連載を開始してから鳩山が辞任するまでの約8年5ヵ月間で、本論文の定義に合致する方法で首相を描いているのは1本だけなのである。また、麻生政権時には実在する政治家（閣僚）の失態を題材としていると思われる作品が1本あったが、鳩山政権時にはそのような作品さえ見られなかった。<sup>26</sup>

先行研究がくり返し指摘しているように、「ウチの場合は」は家庭的な作風に徹し、政治家や政治問題をほとんど扱わない「純家庭的4コマ漫画」であり、この特徴は連載を開始した小泉政権時からいささかも変わっていない。後述するように、「コボちゃん」（『読売新聞』朝刊）と「ののちゃん」（『朝日新聞』朝刊）にも類似した特徴が見られる。

「ウチの場合は」が「純家庭的」な漫画であることは、作者の森下自身もはっきりと認めている。2009年4月10日号で連載2,000回を迎えた際に、森下は連載のねらいをこう説明している。「タイトルにも表れているように、よそのウチに行くとかわが家とはまったく文化が違いますね。読んだ人が『ウチの場合はこうだよ』と話したり、共感してもらえればうれしいです」。誰もが「共感」できるような、ごく普通の家庭内のちょっとした出来事を描いていることがわかる。政治家や政治問題とは本質的になじまない漫画だといえる。<sup>27</sup>

ただし、「ウチの場合は」がいくら非政治的であるにしても、もっとも「描かれやすい」首相であった鳩山でさえ1度も描かれていない事実は、家庭漫画の首相描写について先行研究が示した仮説の蓋然性を見定める上で、さらなる研究が不可欠であることを示している。その仮説とは、「ウチの場合は」のような家庭漫画で「首相が描かれるのは、政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど首相の言動が社会で注目され、大きなニュースとして（とくにテレビなどマス・メディアで）報道されている場合にほぼ限定される」というものである。つまり、政治家や政治問題をほとんど扱わない家庭漫画で首相が描かれるのは、マス・メディアでくり返し話題にされるなど、首相の言動がそれだけ社会全体で注視されている場合に限られる、というのである。

鳩山の在任期間中、「ウチの場合は」は首相を1度も描いていないわけだから、首相描写に関する上述の仮説を直接あてはめることはできないが、歴史的な政権交代を実現した鳩山でさえ作品化されなかった事実は軽視できない。もちろん、「描かれない理由」を突きとめることは本質的に困難であるため、今後、「ウチの場合は」がいかなる作品で首相など政治家や政治問題を描くのかを注視しつづけ、少しでも参考になる事例を積みあげていく必要がある。

#### ・コボちゃん（植田まさし）『読売新聞』（朝刊）

『読売新聞』の朝刊で1982年4月から連載されている「コボちゃん」（植田まさし）は、主人公一家の日常生活を描くきわめて家庭的な4コマ漫画である。連載8,000回を機に2004年12月1日号から（一部地域除く）全国紙の4コマ漫画としてはじめてカラー化され、2010年6月14日号で連載1万回

に到達した。2012年4月には連載30周年を迎え、本論文執筆時点(2012年11月)でも1万800回を超えてなお継続中である。

「コボちゃん」に登場する主要人物は、たんぽぽ幼稚園に通う5歳の主人公・コボ(田畑小穂)とその家族、会社員の父親・耕二、専業主婦の母親・早苗、祖父・山川岩男、祖母・ミネ、それに親戚の大森竹男である。飼い猫のミーと犬のポチもしばしば家族の一員のように登場する。一家は東京都の私鉄沿線に居住している。「コボちゃん」は作者の幼少時代の愛称であるという。なお、コボには現在、妹・ミホ(実穂)がいるが、上述の連載1万回目の作品(2010年6月14日号)で誕生し、名前は公募で集まった候補のなかから作者が選んだ。したがって、鳩山の在任期間中(2009年9月16日～2010年6月8日)にはまだ登場しない。また、ミホの誕生と成長ともない、連載開始当初より5歳に設定されていたコボも幼稚園を卒園し、2011年4月に「みどり小学校」に入学している。もちろん、コボの小学校入学も鳩山の首相辞任後の出来事である。<sup>28</sup>

作者の植田まさし(本名・植田正通)は、とくにサラリーマンむけの4コマ漫画を得意とする漫画家で、その活躍ぶりは「彼の作品が人気を博し、その結果として4コマ漫画専門雑誌が刊行され[るなど]4コマ漫画における革命児」と評されるほどである。植田は1947年に東京都世田谷区に生まれ、香川県で育った。1969年に中央大学を卒業後、1971年に「ちょんぼ君」(『週刊漫画TIMES』)でデビューした。以来、4コマ漫画を中心に執筆活動をつづけている。その他の代表作として、「かりあげクン」(『漫画アクション』など)、「フリテンくん」(『月刊まんがライフ』など)、「のんき君」(『週刊漫画TIMES』)、などがある。「コボちゃん」と「かりあげクン」はテレビアニメ化、「フリテンくん」は映画化、「のんき君」はドラマ化されている。主な受賞歴に、第28回文藝春秋漫画賞(1982年)、「コボちゃん」で受賞した第28回日本漫画家協会賞優秀賞(1999年)がある。<sup>29</sup>

作品の分析に移ると、「コボちゃん」はきわめて家庭色が強い新聞4コマ漫画で、鳩山の在任期間中に首相を描いた作品は皆無(259本中0本)であった。『毎日新聞』(夕刊)の「ウチの場合は」(209本中0本)や『朝日新聞』(朝刊)の「ののちゃん」(163本中1本)と同様、政治家や政治問題とはほぼ無縁の典型的な家庭漫画であることがわかる。鳩山が辞任した直後、連載1万回を達成した際に作者を紹介した『読売新聞』の記事も、「コボちゃん」を「家庭漫画」と特徴づけている。<sup>30</sup>

首相を登場させることがほとんどないという点では、少なくとも小泉政権時から「コボちゃん」の作風はほぼ一貫している。先行研究によれば、5年5ヵ月に及んだ在任期間中に小泉を描いた作品は1,922本中1本(0.05%)だけで、その後もほぼ変わらず、安倍は356本中0本、福田は355本中1本(0.28%)、麻生は347本中0本、と頻度はきわめて低いままである。小泉から鳩山までの約9年1ヵ月間を通じて、本論文の定義に合致する方法で首相を描いているのはわずか2本しかないわけである。しかも、その2本とも政治的な批評性・風刺性はほとんど含んでいない。「コボちゃん」の作品世界に首相が入り込む余地は極端に少なく、先行研究が「純家庭的4コマ漫画」と特徴づけているのも十分に首肯できる。<sup>31</sup>

とくに鳩山政権時の「コボちゃん」は、首相就任から約1ヵ月後の2009年10月14日号(No.9764)

# コボちゃん

植田ましろ 9799



図9 2009年11月19日号 (No.9799)

# コボちゃん

植田ましろ 9815



図10 2009年12月5日号 (No.9815)

の作品で早苗の妊娠が発覚したことで、以前よりもさらに政治性を希薄化させたと考えられる。先行研究によれば、「コボちゃん」では首相が作品化されることはほとんどないものの、かといって政治家や政治の話題がまったくのぼらないわけでもなかった。麻生の在任期間中には、登場人物たちはしばしば、選挙など社会で大きな関心を集めた政治的な問題や出来事について語りあい、さらにはそれ

に参加している。加えて、1本だけではあるが、政権交代に対する政治風刺が認められる作品さえあった。したがって、鳩山の「描かれやすさ」や先行研究が指摘した仮説にかんがみて、首相を描く作品があっても不思議ではなかった。ところが、鳩山の首相就任からほどなくして早苗の懐妊が判明したことで、「しばらくは妊娠関係のエピソードが多くなります」と作者自身が公言したとおり、漫画全体の方向が新しい家族の誕生にむいてしまった。鳩山の在任期間は、ほぼそのまま早苗の妊娠期間とかさなる。その分、以前にも増して政治色が薄まったと考えられる。<sup>32</sup>

多少なりとも政治的な題材を扱っていると思われる作品も2本あるが、いずれも批評性・風刺性が希薄で、「純家庭的4コマ漫画」を逸脱しない内容である。2009年11月19日号(No.9799、図9)の作品と2009年12月5日号(No.9815、図10)の作品がそれで、いずれも民主党政権が実施した「事業仕分け」を題材としている。しかし、一見して登場人物たちが政治的な発言をしていないことは明白で、作品の柱はあくまで些細な家庭内の出来事である。唯一、図9でコボの祖父の山川岩男だけが「国はこんなふうになりませんように」(4コマ)と発言しているが、時事的4コマ漫画で見られるような具体性のある批評・風刺をしているわけではない。特定の政治家、あるいは政党を名指ししているわけでもない。事業仕分けは家庭的な作品を成立させるためのきっかけ、あるいは状況設定にすぎないのであり、時事的4コマ漫画のように政治的な評論や意見表明を意図して題材としているのではない。

もっとも、上の2本の作品で事業仕分けが扱われていること自体は、家庭漫画の首相描写に関して先行研究が示した仮説である程度は説明できる。首相は描かれていないものの、民主党の目玉政策の1つである事業仕分けは、「政治とはまったく無縁の家庭でも話題にのぼるほど社会で注目され、大きなニュースとして(とくにテレビなどマス・メディアで)報道」されたからである。ほぼ同時期の2009年11月に朝日新聞社が実施した世論調査では、行政の無駄を減らす鳩山内閣の取り組みを「評価」すると答えたのは実に76%にのぼり、内閣そのものの支持率62%を上回っていた。当然、事業仕分けの様子や内容は、図10の4コマ目で描かれているように、テレビをはじめマス・メディアで連日のように報道されていた。<sup>33</sup>

いずれにせよ、鳩山政権時の「コボちゃん」には政治家や政治問題を扱った作品がほとんどないため、家庭漫画に関して先行研究が提示した仮説の一般化やその他の研究課題に取り組むためには、さらなる研究の積み上げが欠かせない。「ウチの場合は」と同じく、「コボちゃん」についても継続的に作品を分析していく必要がある。

16 作者自身や漫画の登場人物については、内藤麻里子「朝刊4コマ漫画『アサッテ君』おめでとう、きょう1万回」『毎日新聞』2003年11月5日、内藤麻里子「読書日和 東海林さだおさん みみっちく、まじめで大胆なショージ節」『毎日新聞』2011年6月7日夕刊、などが参考になる。

17 東海林の生い立ちや漫画家としての経歴については、東海林さだお『東海林さだお自選 なんたって「ショージ君」 東海林さだお入門』(文春文庫、2003年)などが参考になる。

18 鳩山を描いた7本は、以下の号に掲載されている。2009年11月28日号(No.12055)、2010年1月27日号

- (No.12113)、2010年4月4日号 (No.12179)、2010年5月12日号 (No.12215)、2010年5月18日号 (No.12221)、2010年5月22日号 (No.12225)、2010年6月8日号 (No.12241)。
- 19 首相が登場するわけではないが、2010年5月27日号 (No.12230) の作品も、首相の「腹案」発言をダジャレの題材にしている。「お腹にあるのが」腹案であるのに対して、妻の尻にしかれる春男が「いつの日かこっちは尻にしいてやるぞ!」とたくらむのを「尻案」と称する内容である。
- 20 首相が登場するわけではないが、2010年4月22日号 (No.12196) の作品も、遅々としてすすまぬ普天間飛行場の移設問題を皮肉っぽく扱っている。昼吉が「普天間の 五月決着 五月闇」という俳句を詠むという内容で、5月までに問題を決着させると首相が明言したことを題材としている。また、詳しくは本論文の後編で論じるが、飛行場問題は「地球防衛家のヒトビト」でも複数の作品で題材とされており、時事的な4コマ漫画にとって取りあげやすい話題であったと考えられる。
- 21 本論文の後編で詳しく分析するが、常人のそれとはかけ離れた鳩山の金銭感覚も「地球防衛家のヒトビト」で作品化されている。
- 22 本論文が定義する「首相を描いている作品」ではないものの、鳩山と小沢を対比・並列して批判的に描いている作品はもう1本ある。2009年12月27日号 (No.12083) の作品がそれで、小沢が虎の絵を眺めながら「いまのがダメになって」「次をたのむといわれたら」「うん」「少しずつその気になってきたな」と次期首相の座を「虎視だんだん」とうかがう、という内容である。この作品では、鳩山は「いまの」と抽象化される一方、小沢は似顔絵で具体的に描かれており、首相よりも実権を握るといわれる小沢に対する強い批評性・風刺性が認められる。補足として、2010年1月21日号 (No.12107) の作品は、小沢自身は描いていないが、小沢の政治資金管理団体の土地購入をめぐる疑惑を題材としている。
- 23 なお、鳩山の在任期間中の「アサッテ君」では次期首相である菅直人は描かれていない。
- 24 作者自身や漫画の登場人物については、次に示す新聞記事が参考になる。五十嵐英美「夕刊で好評連載『ウチの場合は』『大門さんち』を語る 森下さん」『毎日新聞』2002年2月22日夕刊、「夕刊連載4コママンガ『ウチの場合は』こんな人たちが大活躍」『毎日新聞』2003年6月24日夕刊、「森下裕美さん 4コマ漫画『ウチの場合は』2000回超え 創作の舞台裏」『毎日新聞』2009年4月15日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は3000回 きょうも『ウチと一緒に』」『毎日新聞』2012年11月8日夕刊、内藤麻里子「ウチの場合は やりがい積み重ね3000回 森下裕美さんと振り返る」『毎日新聞』2012年11月9日。加えて、連載3,000回を記念して出版された森下裕美『ウチの場合は ベストセレクション 連載3000回スペシャル』(毎日新聞社、2012年)も有用である。
- 25 新聞4コマ漫画以外の森下の活動については、内藤麻里子「森下裕美さんが新作漫画『夜、海へ還るバス』」『毎日新聞』2008年6月11日夕刊が参考になる。
- 26 安倍を描いた1本は、2007年9月22日号 (No.1562) の作品である。また、麻生政権時に掲載された2009年3月7日号の作品 (No.1972) は、ろれつの回らぬ状態で「もうろう記者会見」をして引責辞任に追い込まれた中川昭一財務・金融担当大臣らを念頭に置いていると思われる。
- 27 内藤麻里子「『ウチの場合は』2000回」『毎日新聞』2009年4月10日夕刊。
- 28 作者自身や漫画の登場人物については、次に示す新聞記事が参考になる。「コボちゃん1000回」『読売新聞』2010年6月14日、「コボちゃん妹 『ミホ』ちゃんに」『読売新聞』2010年6月16日、佐藤憲一「気になる! コボちゃん来年は小学生」『読売新聞』2010年12月15日、「コボちゃん入学記念 ご両家夢の共演 \*植田さん・けらさん対談」『読売新聞』2011年4月6日、「笑顔届け1万640回 コボちゃん きょう30周年」『読売新聞』2012年4月1日。
- 29 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』(ミネルヴァ書房、2009年)、12。
- 30 「笑みコボれる28年」『読売新聞』2010年6月14日。
- 31 小泉と福田を描いたのは、それぞれ2001年4月27日号 (No.6761) と2008年9月4日号 (No.9371) の作品である。
- 32 「『コボちゃんママおめでと』『まさかの急展開』」『読売新聞』2009年10月15日。政権交代に対する風刺が込められていると考えられるのは、麻生の在任期間中に掲載された2009年9月4日号の作品 (No.9725) である。「政権が交代して日本はどれくらい変わりますかねー」と意見を求める耕二に、岩男が腕組みを変えながら「これくらいかな」、つまり、大きな変化は望めないという旨の回答をしている。
- 33 「内閣支持微減62% ムダ削減『評価』76%」『朝日新聞』2009年11月16日。

【Abstract】

## Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 2): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009-2010

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yukio Hatoyama during his tenure, from September 16, 2009 to June 8, 2010.

As the second installment of a three-part series, this article (Part 2) analyzes qualitatively how *Mainichi*'s "Asatte Kun" (Mr. Day-after-Tomorrow), "Uchi no Baai ha" (In Case of our Family), and *Yomiuri*'s "Kobo Chan" (Kobo, the Li'l Rascal) depicted Prime Minister Hatoyama.